

12月 新着図書

おひとり2冊まで、2週間（新着本は1冊）借りられます。



日野南コミュニティーハウス

駅の名は夜明

著者名：高田郁

妻の介護に疲れ、行政の支援からも見放された夫は、長年連れ添った愛妻を連れ、死に場所を求めて旅に出る（表題作「駅の名は夜明」）。幼い娘を病で失った母親が、娘と一緒にいくと約束したウィーンの街に足を運ぶ。そこで起きた奇跡とは？（「トラムに乗って」）。病で余命いくばくもない父親に、実家を飛び出し音信不通だった息子が会いにいくと…（「背中を押すひと」）。鉄道を舞台に困難や悲しみに直面する人たちの再生を描く九つの物語。大ベストセラー『ふるさと銀河線 軌道春秋』の感動が蘇る。

老害の人

著者名：内館牧子

双六やカルタの製作販売会社・雀躍堂の前社長・戸山福太郎は、娘婿に社長を譲ってからも現役に固執して出勤し、誰彼かまわず捕まえては同じ手柄話をくり返す。彼の仲間も老害の人ばかり。素人俳句に下手な絵をそえた句集を配る吉田夫妻に、「死にたい死にたい」と言い続ける春子など、“老害五重奏”は絶好調。「もうやめてよ」福太郎の娘・明代はある日、たまりかねて腹の中をぶちまけた。

無人島のふたり 120日以上生きなくちゃ日記

著者名：山本文緒

ある日突然がんと診断され、夫とふたり、無人島に流されてしまったかのような日々が始まった。お別れの言葉は、言っても言っても言い足りない。余命宣告を受け、それでも書くことを手放さなかった作家が、最期まで綴った日記。

絶筆

著者名：石原慎太郎

2022年2月1日に死去した石原慎太郎氏。その最後の文学的結晶——限りなくピュアな初恋の記憶を描いた「遠い夢」、死後発見された「死への道程」など、単行本未収録のまま残された作品を収録。「太陽の季節」から67年、まさに「白鳥の歌」と呼べる一冊。

拾われた男

著者名：松尾諭

自宅前で航空券を拾ったら、なぜかモデル事務所に拾われた。フラれること13回、借金は膨らみ、オーディションには落ちてばかり。それでも男は人との縁を繋ぎ、やがて本当の恋をし、大役を射止める。そんな折、アメリカから一本の電話がかかってきて…。俳優・松尾諭の、笑いと涙のシンデレラ（！？）ストーリー。

葉と嘘の季節

著者名：米澤穂信

ベストセラー『本と鍵の季節』（図書委員シリーズ）待望の続編！直木賞受賞第一作 猛毒の葉をめぐる、幾重もの嘘。高校で図書委員を務める堀川次郎と松倉詩門。ある放課後、図書室の返却本の中に押し花の葉が挟まっているのに気づく。小さくかわいらしいその花は——猛毒のトリカブトだった。持ち主を捜す中で、ふたりは校舎裏でトリカブトが栽培されているのを発見する。そして、ついに男性教師が中毒で救急搬送されてしまった。誰が教師を殺そうとしたのか。次は誰が狙われるのか……。 「その葉は自分のものだ」と嘘をついて近づいてきた同学年の女子・瀬野とともに、ふたりは真相を追う。

涙のあとに、微笑みを 菓子店「ほほえみ」・光り子の物語

著者名：浅田宗一郎

幸道光り子。1973年、尼崎の長屋「さつき文化」で生まれる。幼なじみで母子家庭に育った江口明、作家志望で繊細な西条司、父親が「京野不動産」社長である京野麗奈らとともに青春時代を過ごした彼女は、貧しい家庭で生まれ育つため、堅実に生計を立てられる銀行員を目指していた。そんな光り子に転機が訪れる。きっかけとなったのは、1995年のあの大地震だった一。

有吉佐和子の本棚

著者名：有吉佐和子

和歌山生まれ、外地育ち、20代デビュー、時代を先駆けたベストセラー作家の素顔。小学生で漱石、鷗外全集を読破し、17歳で堂々「読後随感」を綴る一。紀州、社会問題、芸道、歴史、女性の生き方、ミステリーなど多彩な著作と舞台紹介、発掘エッセイ、単行本未収録日記、脚本、小説「六十六歳の初舞台」を収録。

ふるさと銀河線 軌道春秋

著者名：高田郁

両親を喪って兄とふたり、道東の小さな町で暮らす少女。演劇の才能を認められ、周囲の期待を集めるが、彼女の心はふるさとへの愛と、夢への思いの間で揺れ動いていた（表題作）。苦難のなかで真の生き方を追い求める人びとの姿を、美しい列車の風景を織りこみながら描いた珠玉の短編集。

